J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 5, No. 1（2021）143～153

知的障害や発達障害のある子供の言語発達を促す支援

松　山　郁　夫

Support for Promoting Language Development of Children with Intellectual Disorders and Developmental Disorders

Ikuo MATSUYAMA

要　　旨

知的障害や発達障害のある子供に対する療育や特別支援教育等においては、その言語発達に必要な要素を幅広く捉えながら支援することが求められる。言語獲得がなされたとしても、その後の言語発達を促す働きかけを継続することが不可欠である。１歳半レベルの発達段階になって、言語獲得がなされた知的障害や発達障害のある子供の発達を促すためには、支援者が言語発達に関係の深い働きと、言語発達を促すための働きかけについて理解しておく必要がある。このため、本研究の目的は、１歳半以上から５歳代の発達段階にある子供の発達を促すために要する言語発達に関係の深い働き、および言語発達を促すための働きかけについて検討することである。したがって、１歳半から５歳児の発達段階にある子供の言語発達を促すために、１歳半から２歳児、３歳児、４歳児から５歳児の３つの発達段階に分けて、言語獲得や言語発達に関する文献に含まれている言語発達に関係の深い働きを抽出し、それに応じた言語発達を促進するのに必要な働きかけを考案することにした。その際、太田ステージ評価との関連も検討したうえで、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけを示すようにした。発達段階を捉えて、それに応じた言語発達を促す働きかけをする重要性が考察された。

【キーワード】知的障害、発達障害、発達段階、言語発達、言語発達に関係の深い働き

Ⅰ．はじめに

平成30年４月から文部科学省の「幼稚園教育要領」、厚生労働省の「保育所保育指針」、内閣府の「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領」が改定された。幼稚園・保育園・こども園には「３歳からは同じ教育」の機能があり、「子ども主体の学びが重要」とされた。また、幼稚園・保育園・こども園にとって、共通の新しい指針として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された。

それは、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉によ

佐賀大学　教育学部　学校教育課程　幼小連携教育コース

る伝え合い」「豊かな感性と表現」である。４歳から５歳代の発達段階の言語発達がなされていれば、これらの方向性に応じた働きかけが容易になると考えられる。

自閉スペクトラム症(自閉症)児のコミュニケーションや言語発達の様相から、その異常性を数えあげ、構造化することで満足することは、人格発達や自我形成の視点から検討していないためである。言語を介して分析することのみに関心が払われ、生活主体者としての行為を介して見るということに不慣れなことによる（中島，1993）と指摘されている。また、言語獲得を支えるのは短期記憶や情報処理過程といったプロセスか、あるいは言語固有の能力か、さらには社会性と言語獲得との関係など明らかになりつつある。しかしながら、まだ完全に解明されていない問題に取り組み、得られた知見をどのように発達支援・教育・臨床につなげていくのかが課題となっている（大伴，2006）。

このため、知的障害や発達障害のある子供に対して、その言語発達に必要な要素を広く捉えながら支援することが求められる。１歳半レベルの発達段階になって言語獲得がなされたとしても、その後の言語発達を促す働きかけを継続することが不可欠である。知的障害や発達障害のある子供の発達を支援するために、長期にわたって使用されてきた発達検査である遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表における１歳６か月から４歳７か月までの「言語」の項目については、表１の通りである。これにより、言語理解と発語は関連しながら発達していくことが窺える。したがって、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査の「言語」の言語理解と発語の項目をチェックすれば、言語に関する働きかけについてある程度考えることができる。

遠城寺式乳幼児分析的発達検査法が簡便かつ有用であり、精神発達や言語発達をみるには、粗大運動、手の運動、基本的習慣の領域は行わず、対人関係、発語、言語理解の３つの領域のチェックをすればよい（諸岡，2005）と言及されている。そのため、この検査を部分的に活用して言語発達を促す働きかけをある程度案出することができよう。しかしながら、知的障害や発達障害のある子供の言語発達を促すためには、対人関係、発語、言語理解の領域よりも、言語発達に関連するより広い領域に目を向けながら働きかけることが求められる。

１歳半レベルの発達段階になって、言語獲得がなされた知的障害や発達障害のある子供の発達を促すためには、言語発達に関係の深い働きと、言語発達を促すための働きかけについて明らかにする必要がある。このため、本研究の目的は、１歳半以上から５歳代の発達段階にある子供の発達を促すために要する言語発達に関係の深い働き、および言語発達を促すための働きかけについて検討することである。

表１　遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表における「言語」の項目（１歳６か月～４歳７か月）

発　語	言語理解
（１：６～１：８）「絵本を見て三つのものの名前を言う」	（１：６～１：８）「目、口、耳、手、足、腹を指示する」（４/６）
（１：９～１：11）２語文を話す（「ワンワンキタ」など）	（１：９～１：11）「もうひとつ」「もうすこし」がわかる。
（２：０～２：２）「きれいね」「おいしいね」などの表現ができる。	（２：０～２：２）鼻、髪、歯、舌、へそ、爪を指示する。（４/６）
（２：３～２：５）自分の姓名を言う。	（２：３～２：５）大きい、小さいがわかる。
（２：６～２：８）２数詞の復唱。（２/３）	（２：６～２：８）長い、短いがわかる。
（２：９～２：11）２語文の復唱。（２/３）	（２：９～２：11)赤、青、黄、緑がわかる。（４/４）
（３：０～３：３）同年齢の子供と会話ができる。	（３：０～３：３）高い、低いがわかる。
（３：４～３：７）文章の復唱。（２/３）（きれいな花が咲いています。飛行機は空を飛びます。じょうず	（３：４～３：７）数の概念がわかる（３まで)。

に歌をうたいます。） （３：８～３：11）両親の姓名、住所を言う。	（３：８～３：11）用途による物の指示。（５/５） （本、鉛筆、時計、椅子、電灯）
（４：０～４：３）４数詞の復唱。（２/３） 5-2-4-9　6-8-3-5　7-3-2-8	（４：０～４：３）数の概念がわかる（５まで）。
（４：４～４：７）文章の復唱。（２/３）（子供が二人ブランコに乗っています。山の上に大きな月が出ました。きのうお母さんと買物に行きました。）	（４：４～４：７）左右がわかる

※出典：遠城寺式・乳幼児分析的発達診断検査表（九大小児科改訂版）（1977）慶應義塾大学出版会

Ⅱ　研究方法

知的障害や発達障害がある場合は、言語発達に遅れが認められることが多い。その場合、上記の言語理解と発語に関する言語発達だけでなく、言語発達を促す関係の深い働きにも目を向けて働きかけを行う必要がある。これまでの１歳半から５歳児レベルの発達段階までの子供の言語発達に必要な関係の深い働きについては、太田ステージ評価等の研究がなされているため、明らかになってきている。

本研究の基本となる見方は発達段階である。発達段階に応じた特徴を正確に捉えて、それに合わせた対応をすることが求められる。特に、シンボル表象機能の発達段階をみる評価法である「太田ステージ評価」では、発達段階を把握した上で、適切な認知発達治療ができるようになっている。「改定言語解読テスト（LDT-R）」による具体的な操作基準を使用して、Stage を６段階とし、各発達段階の課題が設定されている。さらに、言語獲得や言語発達に関係の深い働きと言語獲得と言語発達に必要な働きかけが提示されている。

以上のことから、本研究では、言語獲得や言語発達に関する文献（表２）に含まれている、言語発達に関係の深い働きを抽出し、それに応じた言語発達を促進するのに必要な働きかけを考案する。それらのことが、太田ステージ（Stage Ⅱ、Ⅲ－１、Ⅲ－２、Ⅳ）が示す発達段階における、Stage Ⅱ・Stage Ⅲ－１と１歳半から２歳児の言語発達、Stage Ⅲ－２と３歳児の言語発達、Stage Ⅳと４歳児から５歳児の言語発達に合致しているのかどうかも検討する。

表２　言語獲得や言語発達に関係の深い働きに着目した文献

著者・発行年・題名・出版社
村井潤一（1977）発達の理論―発達と教育・その基本問題を考える　ミネルヴァ書房
Ｔ．Ｇ．Ｒ．バウアー（訳：岡本夏木）（1979）乳児の世界―認識の発生・その科学　ミネルヴァ書房
Ｔ．Ｇ．Ｒ．バウアー（訳：岡本夏木）（1980）乳児期―可能性を生きる　ミネルヴァ書房
野村庄吾（1980）乳幼児の世界―こころの発達（岩波新書）　岩波書店
岡本夏木（1982）子どもとことば（岩波新書）　岩波書店
岡本夏木（1985）ことばと発達（岩波新書）　岩波書店
若林慎一郎・西村辨作（1988）自閉症児の言語治療　岩崎学術出版社
無藤隆・田島信元・高橋恵子編（1990）乳児・幼児・児童（発達心理学入門）　東京大学出版会
岡本夏木・浜田寿美男（1995）発達心理学入門（子どもと教育）　岩波書店
村井潤一・小山正（1995）障害児発達学の基礎―障害児の発達と教育　培風館
野村庄吾（1996）障害児教育入門（子どもと教育）　岩波書店

堅田明義・梅谷忠勇編著（1998）知的障害児の発達と認知・行動　田研出版
中島誠・村井潤一・岡本夏木（1999）ことばと認知の発達（シリーズ人間の発達）　東京大学出版会
岩立志寿夫・小椋たみ子編著（2002）言語発達とその支援　ミネルヴァ書房
小山正・神土陽子編（2004）自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達　ナカニシヤ出版
岡本夏木（2005）幼児期―子どもは世界をどうつかむか（岩波新書）　岩波書店
小椋たみ子・小山正・水野久美（2015）乳幼児期のことばの発達とその遅れ：保育・発達を学ぶ人のための基礎知識　ミネルヴァ書房
臨床発達心理士認定運営機構（監修）・秦野悦子・高橋登編（2017）言語発達とその支援（講座・臨床発達心理学）　ミネルヴァ書房
臨床発達心理士認定運営機構（監修）・本郷一夫・田爪宏二編集（2018）認知発達とその支援（講座・臨床発達心理学）　ミネルヴァ書房
小山正（2018）言語発達　ナカニシヤ出版
Margaret Harris, Gert Westermann（訳：小山正・松下淑）（2019）発達心理学ガイドブック―子どもの発達理解のために　明石書店

Ⅲ　結　　果

知的障害や発達障害によって、言語発達が滞っている子供における言語理解と発語の発達に焦点をあてるだけでなく、言語発達に関係の深い働きについて全体的に検討する必要がある。表２の文献を使って、１歳半から２歳児、３歳児、４歳児から５歳児の３つの発達段階に分けて言語発達に関係の深い働きを抽出し、必要な働きかけを導き出すことにした。その結果、各発達段階における言語の発達、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけに関して、表３から表８のように整理された。これらにより、次の通り、１歳半から２歳児、３歳児、４歳児から５歳児の各発達段階にある子供の言語発達に関係の深い働き、およびそれらに応じた言語発達を促すための働きかけが示唆された。

⑴　１歳半から２歳児の言語の発達、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ

１歳半から２歳児の言語の発達については表３、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけについては表４の通りである。言語発達を促すための働きかけには、「①生活場面でわかる言葉や使える言葉を増やす。」、「②問いかけ合う楽しさを育てる。」、「③形容詞や副詞等の理解を広げながら、区別して比較する力を育てる。」、「④文を作る力を育てる。」、「⑤日常生活を題材にした絵本で、実際の体験を思い浮かべたり、話し合ったりする楽しさを味わうようにする。」を重視することが求められる。

そのため、日常生活や遊びの中で、バスに乗ったり太鼓をたたいたりするような「組み合わせ、結びつきの変化する行動や遊び」、大きい声を出したり小さい声を出したり、速く走ったりゆっくり歩いたりするような「区別して比較する行動や遊び」、日用品、玩具、積木等を使った「みたて・つもり遊び」、絵画や粘土やブロック等を使った「素材を使って創る遊び」、一緒にお遊戯をするような「同年齢児との関り」、イヤにはどっちにしようか？のように、自分で選択するように配慮するような「自己主張が認められる」体験ができるような配慮が求められる。

表３　言語の発達（１歳半～２歳児）

言語理解	言語表出
①生活や遊びの中で、自分から周囲の物事に関心をもって、どんどん言葉を覚えていく。 ②物の名称の理解が確実になり、「〇〇は？」の質問に対して正しく指さしができる。 ③物の用途や動作を聞いて（「〇〇するものどれ？」「△△してるのどれ？」）指さすことができるようになる。（２歳半） ④形容詞や副詞などの抽象的な言葉（大小、色、上下、もうひとつ、あとで）にも関心が向き、少しずつ理解するようになってくる。（２歳～２歳半） ⑤絵本やお話（素話）を楽しむようになる。 ・絵本を見ながら尋ねあうのを喜ぶ。 ・好きな話を何度も聞きたがる・せがむ。	①生活や遊びの中で、自分から言葉を使うことが盛んになる。 ②自分で文を作ることが増えていく（１歳後半から２語文が増え、２歳後半になると３語文が増えていく）。 ③「だれ？」「どうして？」「なあに？」等の質問を繰り返すことが盛んになる。（２歳～２歳半） ④名詞や動詞だけでなく、代名詞（「これ」「あれ」「ここ」「あっち」）、形容詞（「ちいさい」「あおい」「おいしい」「きれい」）、副詞（「もっと」「はやく」「いっぱい」「すごく」）、疑問代名詞（「どこ？」「なに？」「だれ？」「どうして？」）、助詞（「～よ」「～ね」「～と」「～も」「～に」「～は」「～を」「～が」）等、さまざまな言葉を使うようになる。 （２歳半）

表４　言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ（１歳半～２歳児）

言語発達に関係の深い働き	言語発達を促すための働きかけ
①イメージを表現する遊びが盛んになる（ごっこ遊びの芽生え）。 ・みたて遊び：玩具や他の物を本物にみたてる。 ・つもり遊び：「～している」「～になった」つもりになり、動作で表現する。 ②素材を使って創る遊びが始まる（創作活動の芽生え）。 ・積木、ブロック、粘土、絵画等、組み合わせたり形を変化させたりして楽しむ（周囲からはそれらしい形には見えなくても、みたてたりつもりになったりする）。 ③同年齢の子供とまねしあったりふざけあったりして遊ぶようになる。 ・自分が意識されてくる（１歳半） ・自分の名前がはっきりわかる。 ・人の指示を受けとめて行動する。 ④自己主張が出てくる（２歳） ・相手と対立させて自己主張をするために「イヤ」と反抗する。これが、比較する力を高め、大小、好き嫌い等の対概念の獲得につながる。 ・自己認識がはっきりとし、記憶が確かになってくる ・自分ですると強く自己主張をする（自分なりに「こ	①生活場面でわかる言葉や使える言葉を増やす。 ・生活や遊びの中で子供自身の行動や興味・関心に合わせて、わかりやすく言葉をかける（単語～２語文）。 ②問いかけ合う楽しさを育てる。 ・楽しくやりとり遊びの一つとして、誘いかける気持ちで、「～は？」「これなあに？」「だれかな？」「～するものどれ？」「なにしてるのかな？」等の問いかけをして、問答の形式を学習させる。 ・子供からの問いかけには受容的態度で丁寧に答える。 ③「赤いね」「大きいね」「ああ、冷たい」「はやく」「あとで」「赤い大きいボール持ってきて」「どっちが高いかな？」等、形容詞や副詞等の理解を広げながら、区別して比較する力を育てる。 ④文を作る力を育てる。 ・単語が出始めたら、その言葉をはっきりと繰り返してかけるようにする。 ・単語が増えてきたら、「バスきたねー」「大きいバスきたよー」等、２～３語文ではっきりと語りかけるようにする。 ・子供が「こーえん」と言ったら「公園いこうね」と返す等、子供の１～２語文を２～３語文に拡充

うなるはず」と関係をとらえ、「こうするつもり」と意思を持つ)。	して返す。 ・２～３語文が増えてきたら、「バスがきた」「バスにのるよ」等のように語りかけて、助詞の使い方を学習させる。 ⑤公園で遊ぶ様子や買物をする様子が描かれているような、日常生活を題材にした絵本で、実際の体験を思い浮かべたり、話し合ったりする楽しさを味わうようにする。

⑵　３歳児の言語の発達、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ

３歳児の言語の発達については表５、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけについては表６の通りである。言語発達を促すための働きかけには、「①内容のつながりのある文章を理解したり話したりする力を育てる。」、「②過去のことや未来のことを理解したり話したりする力を育てる。」、「③筋のある物語を楽しむ力を育てる。」を重視することが求められる。

これらのことから、日常生活や遊びの中で、じょうろに水を汲んで花に水をかけたりおやつの前に玩具を片付けて手を洗うような「つながりのある行動や遊びをたくさんする」、ごっこ遊びでアニメのキャラクターになったり工作や絵のような創作活動をしたりして、「イメージを豊かにする」、集団活動において順番を守ったり当番の役割を果たすことをして「自分自身をコントロールする」体験ができるように配慮する必要がある。

表５　言語の発達（３歳児）

言語理解	言語表出
①話の筋や順序を追えるようになる。 ・簡単な筋のある物語を楽しむ。 ・繰り返しの多い物語を好む。 ・「それから」と話の続きを催促する。 ・物語を一言も変えずに何回も話してもらいたがる。 ②身近な過去や未来のことを理解できるようになる。 ・「きのうどこに行った？」「園で何をしたの？」等、過去の体験を尋ねると答える。 ・「あしたどこに行く？」「おやつ何にする」等、未来への意思を質問すると答える。 ・簡単な約束を守る。	①初歩的な時間の観念が芽生える。 ・「きのう～した」「あした～する」「今～の時間」等、過去・現在・未来・時間を表す言葉を使うようになる。 ②文章をつないで内容のつながりのある話をしるようになる。 ・絵本を見て筋のある話をする。 ・体験したことを順序だてて話す。 ③接続詞・接続助詞を使うようになる。 ・「そして」「それから」「だから」「だって」「でも」等 ・「～と」「～も」「～から」「～ので」「～のに」等

表６　言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ（３歳児）

言語発達に関係の深い働き	言語発達を促すための働きかけ
①ごっこ遊びが盛んになる。 ・素材がなくても、アニメの主人公や好きな動物等のイメージだけで「つもり」になりきれる。 ・一貫して「みたて」続ける役を演じる等、長時間同一のイメージを持ち続ける。	①内容のつながりのある文章を理解したり話したりする力を育てる。 ・２つのことを結びつけて語りかける（例：「おやつにするから、おもちゃ片付けようね」)。 ・「それから」「どうして」等、尋ねて話のつながり

・積木で舞台を創って「ごっこ遊び」をし、いくつかの遊びを関連づけて遊ぶ。 ②子供同士の「ごっこ遊び」で役を受け持つことができるようになる。 ③創作活動でイメージを形にできるようになってくる（目的をもって描き創り、それらしく見える）。 ④自己コントロールが可能になってくる（3歳）。 ・大人の励ましが必要だが、自分がしたいことと他からの要求を調節して、がまんするなどして順番を待つこと等ができる。 ⑤自己コントロールが可能になってくると、「～しながら～する」力が芽生え、内言語や思考が育ち、文を並べて話すことにつながる。	を聞き出す。 ②過去のことや未来のことを理解したり話したりする力を育てる。 ・過去の経験を話題にして、問いかけるようにする（例：「昨日、動物園に行ったね」「何がいた？」「どの動物が好きかな？」）。 ・未来のことを話題にして、問いかける（「あした遊園地に行くよ」「何に乗っていく？」「何して遊ぶ？」） ・簡単な約束をする（例：「お兄ちゃんが帰ってきたら、おやつにしようね」） ③筋のある物語を楽しむ力を育てる。 ・単純な繰り返し･簡単な筋のあるものから楽しむ。 ・毎日、繰り返して聞かせる。 ・「それからどうしたかな？」と問いかけるようにする。

⑶　4歳児から5歳児の言語の発達、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ

4歳児から5歳児の言語の発達については表7、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけは表8の通りである。言語発達を促すための働きかけには、「①道理の通った文章を理解して、話す力を育てる。」「②子供同士で会話をする機会をもたせる。」「③物語を楽しむ力を育てる。」「④言葉遊びを楽しむようにする。」を重視することが求められる。

これらことから、日常生活や遊びの中で、動植物の世話をしたりおつかいに行かせるような「計画性のある行動や遊びを増やすこと」、子供同士で話し合って材料を揃えたり役割を決めたりして「子供同士のごっこ遊びが豊かに展開されること」、工作や折り紙等を使ってイメージを持って計画的に創るような「創作活動を豊かにすること」、鬼ごっこやかくれんぼ等の「ルールのある遊びを覚えること」、ルールや約束に基づく集団活動を自制心、自律心を育てること」を多く体験できるような配慮が必要になる。

表7　言語の発達（4歳児～5歳児）

言語理解	言語表出
①話の道理を理解するようになる。 ・「～だから～」「～だけれども～」「もし～なら～」等、原因や理由、条件や仮定等を理解したり考えたりする。 ・言われたことや頼まれたことを時間を経過しても覚えていて実行する。 ・素話等、長い筋のある物語を楽しむ ②言葉そのものへの興味が育ってくる。 ・「しりとり」「なぞなぞ」「反対語」「たのつく言葉」等による「言葉遊びを楽しむ（5歳～5歳後半） ・「～ってどんなこと」と質問する。（5歳後半）	①言葉の発音をほとんど間違えなくなる。 ②文章を関係づけて道理の通った話をするようになる。 ・体験したことや頭の中で考えていることの要点を把握して、接続詞や接続助詞を正しく使って、人にわかるように言い表す。 ③子供同士で会話をすることが自由にできるようになる。

表８　言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけ（４歳児～５歳児）

言語発達に関係の深い働き	言語発達を促すための働きかけ
①ごっこ遊びを友達同士で会話しながら展開するようになる。 ②創作活動では、時間的な順序を必要とするものができるようになる（例：折り紙、工作、体験したことを絵に描くこと） ③ルールのある遊びができるようになる（例：かくれんぼ、鬼ごっこ、ジャンケン、トランプ、ケンパ） ④自制心や自律心が育ってくる。（４歳～５歳） ・自分がしたいことと他からの要求を比較して吟味して、自分はどうしたらいいかを考える。 ・自分で自分の行動をかえりみるようになり、他児と協力したり協同したりするようになる。 ・ルールを理解したり約束して守ったりすることができるようになる。 ・自分には不本意であっても、他児の意見に従う等、自己のコントロールができるようになる。 ・「～だけれども～する」という相反する論理を吟味して、文を関係づけて話すことができるようになる。	①道理の通った文章を理解して、話す力を育てる。 ・言葉で説明したり言いつけを守らせたりする。 ・言葉で説明させたり考えさせたりする「（例：「今度の日曜日、晴れていたらどうする？雨だったらどうする？」）。 ・まとまりのある話をさせる（例：昨日の出来事、アニメのストーリー、絵の説明） ②子供同士で会話をする機会をもたせる。 ・役割を決めてごっこ遊びを展開させる（例：お店屋さんごっこ）。 ・子供同士でさまざまなことを話し合わせて、決めさせる（例：グループの名前、取り組むこと、役割）。 ③物語を楽しむ力を育てる。 ・素話を聞かせる ・さまざまなストーリーのある絵本を読む ④言葉遊びを楽しむようにする（例：「た」のつくことば、反対言葉、しりとり、なぞなぞ）。

⑷　発達段階と太田ステージとの関連

太田ステージにおける認知発達治療の目標については、Stage Ⅱの場合、「シンボル機能の芽生えを確実にする」、「個々の適応行動を獲得する」、Stage Ⅲ－１の場合、「シンボル表象機能の基礎を確実にし、基本的な関係の概念の理解を促す」、「適応行動の獲得」、Stage Ⅲ－２の場合、「表象空間を広げ、思考の柔軟性を促す」、「適応行動を獲得する」、Stage Ⅳの場合、「表象空間の広がりと思考の充実を目指す」、「社会的スキルの獲得」があげられている。加えて、どの Stage にも「異常行動の予防と減弱」があげられている（太田・永井・武藤，2015）。

言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけについては、１歳半から２歳程度の発達段階である Stage Ⅱと２歳半程度の発達段階である Stage Ⅲ－１が表４、３歳児の発達段階である Stage Ⅲ－２が表６、４歳児から５歳児の発達段階である Stage Ⅳが表８の記述に適合する。これらより、発達段階と Stage には関連があるだけでなく、各発達段階に応じた言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけが明示された。

Stage Ⅱ、Stage Ⅲ－１、Stage Ⅲ－２、Stage Ⅳの各重点課題は表９の通りである。健常児では１歳半から２歳程度の発達段階である Stage Ⅱは、シンボル機能の芽生えの段階で、物に名前のあることは理解しているが用途はわからない。２歳半程度の発達段階である Stage Ⅲ－１は、シンボル機能がはっきりと認められる段階で、物に名前や用途の理解はしているが、円の大小比較ができない。３歳児の発達段階にある Stage Ⅲ－２は、概念形成の芽生えの段階で、円の大小の相対比較ができるが空間関係は理解できない。４歳児から５歳児の発達段階にある Stage Ⅳは、基本的な関係の概念が形成された段階である。

表９　Stage Ⅱ、Stage Ⅲ－１、Stage Ⅲ－２、Stage Ⅳの各重点課題

Stage Ⅱ	Stage Ⅲ－１	Stage Ⅲ－２	Stage Ⅳ
１．視覚－運動協応や随意運動の発達を促す ２．物に名前のあることの理解の基礎を確実にする 色・形の抽出（幼児） 色・形の統合と分解（学童以上） 名詞理解を確実にする 用途による物の理解 ３．イメージの世界の芽生えを確実にする 再現遊びと簡単な見立て遊び ４．コミュニケーションの基礎をつくる 要求手段の有効な使用 小集団の中で行動できる	前期 １．ことばにより属性を認識し、言葉で表出する 色・形の理解と言語表出 動作語 ２．言葉の世界を豊かにする 語彙数を増やす ３．物と物との関係の概念の理解を促す チャンキング、仲間集め 後期 ４．言葉の世界を豊かにする 簡単な文の言語表現 ５．物と物との関係の概念の理解を促す 「同じ」「違う」の理解 比較の基礎をつくる 共通 ６．イメージの世界を確実にする 身近な物の描画や制作 ７．コミュニケーションを豊かにする コミュニケーションに有用な言葉 小集団活動へ参加する	前期 １．視覚－運動協応や随意運動の発達を促す ２．言葉の意味内容をふくらます 簡単な類推 ３．物と物との関係の概念の理解を確実にする 言葉による列挙 言葉による異同弁別 頭の中での大小比較 ４．数・量の概念の発達を促す 数の概念 ５．コミュニケーションを活発にする 対人関係に有用な言葉 後期 １．視覚－運動協応や随意運動の発達を促す 言葉の指示による動作 ２．言葉の意味内容を膨らます いろいろな質問への応答 疑問詞の理解 文字による意味理解 ３．物と物との関係の概念の理解を確実にする 空間における位置理解 ４．数・量の概念の発達を促す 数の合成・分解（学童以上） やさしい文章題（学童以上） ５．コミュニケーションを活発にする 役割による言葉の違い 共通 ６．イメージの世界を豊かにする 絵本・本などの簡単なストーリーを楽しむ 描画・制作 ７．コミュニケーションを活発にする 集団でのゲームや約束事を理解する。	１．視覚や言葉による随意運動の発達を促す 聴覚―運動スキル ２．言葉を通して表象の世界を豊かにする 言葉（名詞）の意味 類推となぞなぞ 文章の理解と表現 ３．時間や空間の関係の理解を広げ、表象の中で観点の自由度を高める。 因果関係 共通点・差異点 物に対する視点の移動 人からの見方の理解 序列の中での比較 ４．数量の概念操作 数量比較 文章題の理解 時間と時刻 ５．イメージを豊かにし表象の世界を広げる 物語を楽しみ発展させる （６．コミュニケーションをより豊かにする （７．自我意識を育てる 注）６、７には重点課題を設定していない。課題としてだけでなく生活全般の中でも働きかける。

※出典　太田昌孝・永井洋子・武藤直子編（2015）自閉症治療の到達点第２版　日本文化科学社
Stage Ⅱ：p155　Stage Ⅲ－１：168　Stage Ⅲ－２：p183　Stage Ⅳ：p196

Ⅳ 考 察

発達段階に応じた言語発達を促すための働きかけについて、１歳半から２歳児の発達段階には、「生活場面でわかる言葉や使える言葉を増やす」、「問いかけ合う楽しさを育てる」、「形容詞や副詞等の理解を広げながら、区別して比較する力を育てる」、「文を作る力を育てる」、「日常生活を題材にした絵本で、実際の体験を思い浮かべたり、話し合ったりする楽しさを味わうようにする」、３歳児の発達段階には、「内容のつながりのある文章を理解したり話したりする力を育てる」、「過去のことや未来のことを理解したり話したりする力を育てる」、「筋のある物語を楽しむ力を育てる」、４歳児から５歳児の発達段階には、「道理の通った文章を理解して、話す力を育てる」、「子供同士で会話をする機会をもたせる」、「物語を楽しむ力を育てる」、「言葉遊びを楽しむようにする」を重視することが求められる。このことから、子供の発達段階に応じた言語発達を支援するためには、日常生活や遊びの中で、各発達段階に応じた体験をできるだけ多く積むことができるような配慮が求められる。

知的障害は、普通の発達の道筋とは違った欠陥的な、あるいは異質な発達のあり方というわけではない。歩み力の相対的な差にすぎない。しかしながら、私達の行動に発達した社会のあり方、生活のあり方の中では、その高度化の度合いに応じて、どうしても、その差が大きな生きづらさを強いてくる。生活の場の中で日常の暮らしの小さな体験を周りの人々と共有していけること、それを様々な努力と工夫で支援していくことが重要である（滝川，2013）。また、発達支援の最重要課題は、子供の心に安心感・信頼感と自信とを育てることである（黒川，2012）と論及されている。したがって、支援者には、これらのことを前提にして常に無理がなく、子供が楽しめるように支援し、発達を促すことが求められる。

シンボル表象機能の発達段階をみる評価法である「太田ステージ評価」では、適切な認知発達治療ができるようになっている。「改定言語解読テスト（LDT-R）」による具体的な操作基準を使用して、Stage Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－１、Ⅲ－２、Ⅳ、Ⅴ以上の６段階に分けられ、各発達段階の課題が設定されている（太田・永井・武藤，2015）。つまり、先述した通り、言語を獲得するために関係の深い働きと言語を獲得するための働きかけが考案されているため、発達段階に応じた全体的発達を促すことができる仕組みになっている。「太田ステージ評価」から、子供の発達を促すために、言語理解と発語の発達だけでなく、言語発達を促すために関係の深い働きと働きかけを考えることが容易になる。

これらのことから、療育や特別支援教育において、知的障害や発達障害の子供の言語発達を促すためには、子供の発達段階に応じた支援が求められる。一つの方法ではあるが、太田ステージで評価して Stage の段階を把握した上で、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけをすることが望ましいと考えられる。

以上、１歳半から５歳児の発達段階にある知的障害や発達障害のある子供の言語発達を促すために、１歳半から２歳児、３歳児、４歳児から５歳児の３つの発達段階に分けて、「太田ステージ評価」との関連も検討した。その結果、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけが明らかになった。

今後の課題は、６歳児以上の発達段階に達した知的障害や発達障害がある子供における言語発達に必要な関係の深い働きと、言語発達を促すための働きかけについて明らかにすることである。

Ⅴ 結 論

本研究では、１歳半以上から５歳代の発達段階にある子供の発達を促すために要する言語発達に関係の深い働き、および言語発達を促すための働きかけについて検討した。１歳半から５歳児の発達段階にある知的障害や発達障害のある子供の言語発達を促すために、１歳半から２歳児、３歳児、４歳児から５歳児の３つの発達段階に分けて、「太田ステージ評価」との関連も検討した結果、言語発達に関係の深い働き

と言語発達を促すための働きかけが示唆された。このため、①子供の発達段階に応じた言語発達を支援するためには、日常生活や遊びの中で、各発達段階に応じた体験をできるだけ多く積むことができるような配慮をする。②支援者は常に無理がなく、子供が楽しめるように支援して発達を促す。③療育や特別支援教育において子供の発達段階に応じた支援をするために、太田ステージで評価してStageを把握したうえで、言語発達に関係の深い働きと言語発達を促すための働きかけをする。以上、発達段階を捉えて、それに応じた言語発達を促す働きかけをする重要性が考察された。

謝　辞

本研究は、昭和60年度に福岡市立心身障害福祉センターにおいて、佐藤生子先生、米田博先生、北山仁美先生と行っていた早期療育研究会で得られた知見を基に実施しました。記して感謝申し上げます。

引用文献

遠城寺宗徳（1977）遠城寺式・乳幼児分析的発達診断検査表（九大小児科改訂版）．慶應義塾大学出版会．
滝川一廣（2013）子どものそだちとその臨床．日本評論社，27-28.
黒川新二（2012）自閉症とそだちの科学．日本評論社，54-55.
諸岡啓一（2005）発達障害児の早期診断と早期介入について―言語発達遅滞の診断と早期介入．脳と発達，37(2)，131-138.
中島雅史（1993）特集　自閉症児のことばの問題　自閉症児のコミュニケーション障害とその治療．聴能言語学研究，10(1)，40-48.
大伴　潔（2006）障害と言語発達．心理学評論，49(1)，140-152.
太田昌孝・永井洋子・武藤直子編（2015）自閉症治療の到達点第２版．日本文化科学社．

参考文献

※表２の通り